

# 時間

松木 正子



小学校に入学してすぐのころの児童は平仮名を読むのさえたどどしいというほうが多いのです。試みに黒板に指示を書いてどのくらい対応しようとするか見てみます。すると立て札を読むように黒板にはりついて一字一字拾い読みをしている姿を見ることがになります。声を出して読み、「そうか、ゝをするんだ。」と自分に言い聞かせるように言ってから行動に移します。声に出すことで、自分の読みを確かめると同時に他の児童に確認する意味もあるのか

もしれません。なかには、自分で理解するのをあきらめて近くの児童に聞いたり、他の児童の行動をまねて済まそうとするちゃっかり組もいます。ところが一年を終わろうとする時期になると、自分が発信者となって自由に文字を使うようになり、詩や物語を書いてみる。持っていくものを友達に知らせる。招待状やお知らせを書くなど質も量も増えてきます。また、最初は友達にプリントを配るのも声を出して読み名前をいちいち確認していたも

のが、漢字でかかれた名前でも何とか対応しようとするようになります。

一年生にとっては、まさしく「わずか一年間、されど一年間」と言えましょう。けれどもこれは決して一年生だけの専売特許ではありません。これほどの変化は見えないながら、小学生の成長はどの学年でもかなり大きいものがあります。何かのおり「7枚の紙を5人に配るのに紙を何枚用意するか」というような場面があったとします。児童はいろいろと考えます。「あのね。かけ算って言うのがあってそれを使うと簡単なんだって。でも僕知らないんだ。」とつても情けなさそうな顔で言います。ところがそれから一年もしないうちに九九を楽々使いこなせるようになります。

また、成長の様子を見ていると刻一刻と変化しているのが目に見えるような気がします。たとえば一年生ですと、一年間に2〜3センチ。六年生の伸び盛りの児童では7〜8センチも伸びるのです。顔つ

きも幼稚園から来たときには、いかにも幼児というぼちゃぼちゃした感じですが、二年生になろうとするころには手足もしっかりしいわゆる少年前期の体つきに近づきます。朝会のように全校児童が集まるたびに目の前の壁が高くなっていくような気がするのです。一年間、児童とつき合っていると、高速度撮影を見ているように感じられるものです。

実は、児童の変化がこんなにもよく見えるような気がし出したのは、私にとってはつい最近のことなのです。一年間が具体的なときとして、視野に入っただって、季節ごとの構内の変化が巡る時を告げてくれることに気づきその変化を楽しむようになったのだから、昔ではありません。もちろん人によって違うのですが、一年間をどの位の時間として感ずるかは、年齢と関係するのではないでしょう。よく高齢者が「年を取ると時間が惜しく」とか「一年間が短くなってね」と言われます。ぼんやりと「そんなものかな」と思っていたのです。

が、いつの間にか「それが分かる年齢」とやらになつていたのかも知れません。

昨年度から、一、二年生の児童に生活科という教科が生まれました。その中で、児童が「自分の成長に気づく」活動が含まれています。本校では、例年一年生で扱っています。けれど時間の流れにまだ無頓着な一年生の児童が自分の一年間を自覚し振り返るのは難しいことです。そこで、昨年まで生活した幼稚園を参観させていただいて以前に座っていた椅子に座ってみたり、幼稚園の生活に直にふれてみる活動を組んでいます。部屋の広さ、遊具の大きさ、生活の様子など、具体的に見たり、ふれたりする感覚を通して自分の成長に気づかせたいと考えているのです。

また、季節感を養う活動もあります。季節ごとに大学構内や植物園などに行き、自然の変化に気づかせようとしています。それぞれの季節の特徴については、ある程度知的に理解できるところもあるよう

ですが、しかし児童にとっては一年間というのはあまりにも長く、季節と行事を関係づける力はまだないようです。

児童は水をはったシャールレにスポンジを置いたときのようにすごい勢いでさまざまなことを吸収し育っていきます。児童にとっては、おとなの一時間が二時間、三時間にもなっているからなのではないかとも思うのです。さて、小学校の児童が学校にいる時間（在校時間）は、低学年で五時間前後、高学年になると七時間から八時間になります。児童の生活時間の多くの時間が小学校の中で過ごされているのです。この時間をどう使えば児童にとって本当に意味あるものなのでしょうか。この時期の児童に育てておきたい本物の力をつけるための教育課程を模索して、本校ではこの時間の運用のために今試行錯誤をくり返しています。

（お茶の水女子大学附属小学校）